

Title	化石の魔法都市：ゲーテとノヴァーリス(1)
Sub Title	Eine versteinerte Zauberstadt : Goethe und Novalis (1)
Author	柴田, 陽弘(Shibata, Takahiro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1995
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.69, (1995. 12) ,p.191(54)- 204(41)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00690001-0204">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00690001-0204</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 化石の魔法都市

——ゲーテとノヴァーリス（1）——

柴田陽弘

## I

ノヴァーリスの遺品には二種類の蔵書目録が含まれている。その一は、1790年9月の日付と「直接イエーナへ持参する、さしあたってはシュレーベンへ送る本」と添書のある合計144点の目録であり、その二は、「製塩所試補フォン・ハルデンベルク氏の書斎の蔵書目録」と題された1801年3月のものである。これには133点の書物が記載されている<sup>(1)</sup>。原典批判版として最も信頼できるコールハマー社の『ノヴァーリス著作集』には、この外にノヴァーリスの遺したメモに記された73点の書籍名も載っている<sup>(2)</sup>。われわれはこれらの乏しい資料からさえ、書物が途方もなく高価だった時代の若き蔵書家の肖像を想像することもできるし、夭折者の教養の一斑も伺い知ることができるのである。まずはこの資料に限定した上で、ノヴァーリスのゲーテ体験に眼を向けることにしよう。

蔵書目録（一）には、『トルクヴァートー・タッソー』『タウリスのイフイゲーニエ』『エグモント』『ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』『シュテラ』『クラヴィーゴ』『若きヴェルターの悩み』の七点が記載されている。いずれも流行作家ゲーテの重版本で、まだ18歳になるやならぬのノヴァーリスが買いもめたものであろう。詩や評論を除いて、この時期までの主要な作品は網羅されている。この頃のノヴァーリスは、アイスレーベンのルター・ギムナージウムの最上級に編入学して3カ月、校長のクリスティアン・ダーヴィット・ヤーニーの薫陶を受けている。ところが1790年の10月5日に、四十七歳でヤーニーが急逝したため同校を退学、同年10月23日にイエ

ーナ大学に入学するのである。蔵書目録(二)は、1801年3月25日、弟の  
カールと友人のフリードリッヒ・シュレーゲルに看取られてノヴァーリス  
が身罷った直後に作成されたものと思われる。目録(一)が文学・歴史・  
哲学の書物で占められていたのに比して、目録(二)のほとんどが自然学  
の書物である。ノヴァーリスの関心の推移が際立っている。この内ゲーテ  
の著作は、『ヴィルヘルム・マイスターの修行時代』と『ゲーテ著作集』(ゲ  
ッセン版全八巻)と『ゲーテ新著作集』(ウンガー版全七巻)の三点にす  
ぎない。目録(一)のノヴァーリスは、ホラチウスやホメロス、ウェルギ  
リウスの翻訳を試み、若干の習作に手を染めたばかりの若者であり、ゲー  
テは四十歳台の円熟期にさしかかった中堅作家であった。目録(二)のノ  
ヴァーリスはフィヒテ、カント、ヘムステルホイスなどの哲学と取り組み、  
独自の世界観を築き上げた作家である。一方、ゲーテはすでに五十歳を越  
え、堂々たる成熟の時をむかえた大家である。この対比を視野に入れなが  
ら目録をつぶさに繙くと、生前の交渉を資料でほとんど跡づけられないこ  
の両者の内面史がそこはかとなく見えてくる。

## II

青年の最初の感動が資料の行間から小波の響きのように伝わってくるの  
が、1796年9月10日の記録である。この日、ゲーテが病床のゾフィを見舞  
ったという。8月18日から10月5日まで、ゲーテはイエーナに滞在した。  
その折にいかなる経緯か不明だが、ノヴァーリスの許嫁ゾフィ・フォン・  
キューンのもとを訪れている。この時ゾフィ十四歳。そもそもノヴァーリ  
スの最初の職歴は、テンシュテットの郡役所の書記を拝命した1794年の10  
月に始まる。のちに印象的な『ノヴァーリス伝』の作者として知られるよ  
うになる同地の郡長ユストとの交誼も、この時に溯る。同年11月17日に、  
郡長ユストに随伴する出張旅行の途上グリュニンゲンに立ち寄ったノヴァ  
アーリスは、1782年3月17日生まれの十二歳の少女ゾフィ・フォン・キュー  
ーンと識り合った。弟のエラスムスに宛てて、ノヴァーリスは「十五分が  
ぼくの運命を決めた」と書いたらしい。われわれは間接的にしかこれを確

認できない。エラスムスの長文の手紙によってである<sup>(3)</sup>。ちなみにエラスムスは十五分という修辞にこだわって、兄の情熱に水を差すような言辞を弄している。ゾフィは下品なところをその内見せるようになるかもしれないとか、今は清純でも、世間に出てからも清らかでありつづけられるだろうとか、あれこれ忠言を呈している<sup>(4)</sup>。そんな心配もものは、ゾフィが十三歳の誕生日をむかえる二日前に、二人は内々の婚約を交わしている。歴史家カール・ルートヴィヒ・ヴォルトマンに宛ててゾフィの訃を報じ、往事を回想して、「ゾフィがぼくのものになりたいと確約してくれたのは1795年の3月15日でした」としているからである<sup>(5)</sup>。それに続けて、ゾフィの最初の罹患は同年の11月7日であったと述べている<sup>(6)</sup>。そしてノヴァーリスが許嫁の発病を知ったのは、その一週間後である<sup>(7)</sup>。1795年11月20日付で弟のカールに宛てて、「ぼくはこの頃つくづく思う、禍福は糾える縄の如しだとね」と述懐し、ゾフィの病気について簡潔に報告している<sup>(8)</sup>。11月14日の土曜日、昼に帰宅すると、使者が来て、哲学（フィロゾフィ）が病気だという伝言を残していったという。「哲学」はゾフィの愛称である。役所に急行し事の次第を知るや、グリューニンゲンへむかう。主治医の宮廷顧問官エープハルトからゾフィの病状を聞いて動転する。肝臓の炎症がひどく、痛みがはげしく、月曜日から不眠と高熱に悩まされている。すでに二度瀉血したが、憔悴が著しく身動きもままならない。だが病人は明るく落ち着いている。その後さいわいにも病状は好転、食欲がもどって、今は快方にむかっていると。

こういった経緯で、ノヴァーリスは許嫁の生と死に否応なく向きあうことになった。この年の暮に、ノヴァーリスはヴァイセンフェルスの製塩監督所の試補に任命されるが、その翌日の12月31日にゾフィの病気が再発する。ゾフィの両親がその旨を報じた手紙が残っている<sup>(9)</sup>。婚約から一年たった記念日に「ゾフィアはわが守護霊」と彫った指輪を誂え、ゾフィの誕生日には詩を献じている<sup>(10)</sup>。この婚約指輪は今もヴァイセンフェルス博物館に所蔵されている<sup>(11)</sup>。1796年6月半ばに、ようやく父の同意を取りつけて正式にゾフィと婚約する<sup>(12)</sup>。7月4日に治療のためゾフィは、母と姉のフ

リーデリーケ・フォン・マンデルスローにつき添われてイエーナへむかう<sup>(13)</sup>。翌5日に最初の手術が行われる。宮廷顧問官シュタルクの執刀である。ノヴァーリスがこれを知ったのは同月10日で、それほどに病勢が進んでいたであろう。7月8日には、友人のフリードリッヒ・シュレーゲルに宛てて、のんびりと婚約を報じ、恋人のことをのろけたりしている。病いが重篤であったことを思えば何んとも痛ましい<sup>(14)</sup>。8月15日にゾフィの二回目の手術が行われた<sup>(15)</sup>。ゾフィが立派に耐えていると友人に報じている。ついで八月末に三回目の苦痛に満ちた切開手術<sup>(16)</sup>が施され、そして術後のゾフィをゲーテが見舞うのである<sup>(17)</sup>。ノヴァーリスはヴィルヘルミーネ・フォン・テュメルへ手紙を書いている。この人はゾフィの異母姉に当たる。

「あの有名なゲーテが先般ゾフィと知り合い、可愛いゾフィに大層関心をもったようです<sup>(18)</sup>。」(1796年9月19日付)

この喜ばしい調子は、イエーナからヴァイセンフェルスにいるノヴァーリスのもとに届いた書翰の気分をそのまま受けついでものである。つねにゾフィの枕辺にあって献身的看護に努めているフリーデリーケ・フォン・マンデルスローとゾフィの連名で、病状を報じ近況を伝える手紙である<sup>(19)</sup>。

「傷口と側面のあざが両方とも今まで以上に痛み、びっくりするほど傷が膿んで、ずっと濡れたままです。」(9月16日付)

となお予断を許さない状況であることを伝えつつ、この劇しい痛みも二回目の手術の時に予測できていたことで、大変よい徴候の表われだという医者診断を記してノヴァーリスを慰めている。さらにゾフィの健気な振舞を讃え、熱が引くといつも陽気になり、目は明るく輝き、健やかな色をたたえて、私を勇気づけてくれると述べている。手紙における修辞を差し引くとしても、ゾフィの病気に立ち向かう姿勢と、それを支えている美質を十二分に伝えていると言えよう。これに続けてゲーテの訪問を誇らかに告げている。

「二三日前にわたしたちの小さな病室は、幸運にもあの偉大な精神の人、

ゲーテをお迎えしました。あの方は魅力的でしたが、長居はなさいませんでした。でもその内にまたお目文字できる栄を賜われるようなご様子でした。」

さらに追伸のように末尾に書き足して――

「不思議なことにわたしたちの小さなお部屋には少しも隙間がございませんが、ゲーテがお見えになるとすぐに窓を開けるようにいたしました。」

これは病人のにおいや膿臭を配慮した、ということであろうか。さらに続けて、ゾフィがたどたどしく書いている。

「ハルデンベルクさま、ほんの一言しか書けませんが、どうかあまり心配なさらないで」

翌1797年の3月1日から10日までグリュニンゲンに滞在したノヴァーリスは、ゾフィの病いがいよいよ悪化したことを知る。3月9日には重体に陥る。3月10日にヴァイセンフェルスに戻るが、これが最後の別れとなる。今日カレンダーへの書き込みメモが遺っているが、淡々として簡潔であるだけに一層ノヴァーリスの悲痛が胸に迫る<sup>(20)</sup>。

「15日、水曜日。わたしの婚約日。

17日、金曜日。今夕、フランケが悲しい報らせを携えて戻った。よりもよってあの人の誕生日に。

19日、日曜日。今朝九時半にあの人は死んだ――十五歳と二日――1784年生まれ。

21日、火曜日。弟アントンの使者とともに今日報らせを受け取った。」

ゾフィの生年（1782年）に誤記があるが、動転によるものであろう。

一カ月後の聖金曜日（4月14日）には、仲のよかった弟のエラスムスの悲報を聞いている。このように親しい者の闘病と死に直面して、ノヴァーリスが独自の死生観を育てていったことは想像に難くないが、それと共に、恋人との出会いと永別にほぼ平行するように驚くべき集中力を発揮して哲学研究に取り組んでいたことも見逃すことができない。すなわち1795年秋にフィヒテの『知識学』に熱中し、「フィヒテ研究」ノートをつけ始め、翌年の秋に一応の区切りをつけているのである<sup>(21)</sup>。

### III

ノヴァーリスは、初めてゾフィの墓に詣でた復活祭の日曜日の翌々日、4月18日に日記をつけ始めている。暦の日付の横に、3月19日のゾフィの昇天日を第一日とする日付も並記しているのが特徴である<sup>(22)</sup>。日誌は7月6日まで書き継がれる。ゾフィの死後31日目から110日目まで。

この日記は、自己省察が普遍的思索にまで昇華するというノヴァーリス独自の様式を示すものとして重要であるが、読書日記としても興味深い。ゲーテ、シェイクスピア、フィヒテ、ヒュルゼン、シェリングを集中的に読んでいる。ゲーテの『マイスター』がしきりに出てくる。『ヴィルヘルム・マイスターの修行時代』である。ちなみに言及は十九回を数える。たとえば――

『ヴィルヘルム・マイスター』の中の、第四巻からぴったりの個所が心に浮かんだ<sup>(23)</sup>。(4月18日)

「午後『マイスター』の二、三節を階下で読んだ。わたしのこれまでの教養形成について、いくつかおもしろいことを思いついた。しきりにゾフィのことを想った――それも心からではなく<sup>(24)</sup>。」(4月21日)

「しきりにゾフィと決心のことを考えた。夕、ヤングの『夜想』を繙く、『マイスター』についてあれこれ思索した<sup>(25)</sup>。」(4月23日)

「終日『マイスター』に没頭した。ゾフィへの愛が新しい光の中にあらわれた。…決心は確固としている<sup>(26)</sup>。」(4月24日)

「朝はもっぱら『マイスター』。しきりにゾフィを想った<sup>(27)</sup>。」(4月25日)

「朝『マイスター』のことをいくつか。そのあと抜書き<sup>(28)</sup>。」(4月26日)

「今朝、盛んに憧憬。そのあと『マイスター』<sup>(29)</sup>。」(4月28日)

「朝、いつものように、あのひとのことを考えた。そのあと批評について。それから『マイスター』<sup>(30)</sup>。」(5月5日)

「『マイスター』の批評を書いた。『マイスター』やそのたぐいのくさぐさを考えながら好天の中を散歩した。花を摘み、墓に撒いた<sup>(31)</sup>。」(5月11日)

ゾフィを哀切に追慕し、ときに慟哭しながら、ノヴァーリスの心情にはつねに『マイスター』が寄り添っている。情動と批評的精神の奇妙な混淆。文中「決心」とあるのは、あと追い自殺の願望を指す。ノヴァーリスの書翰がいわば外界との境位を伝えるものとするなら、日記は自己への問いかけである<sup>(32)</sup>。内面に向かい合う魂の記録である。このような極めて凝縮した内省の表現を、ノヴァーリスはいたるところに刻みつけている。それを「日記（ターゲブーフ）」と称することもあれば、「日誌（ジュルナール）」と呼ぶこともある。「断章」には日記的記述がしきりに出てくる。ノヴァーリスにとって重要な表現の一形式なのである。「ゾフィ死後の日記」は、世紀末にあって新しい時代を予感させる種々の要素を含んでいる。たとえば墓参は新しい習俗である。墓前にぬかずき故人を追懐することしかり。滂沱たる涙を流す感傷過多は、つぎの十九世紀に大流行した。死の床に横たわる家人を見守る図も画家の恰好の材料となった。

さてつぎに日誌はクライマックスを迎える。5月13日、ゾフィ死後56日目である。この日ノヴァーリスは幻視ないし霊視の瞬間を体験する。このところ天気が変わりやすく、早朝の好天が昼を過ぎるとにわかになつた。そして夕方、ゾフィの墓に詣で、名状しがたい喜悦、めくるめく恍惚にとらわれる。「墓を塵のように吹き払った。数世紀が数瞬のようだった」とノヴァーリスは記している。「あのひとがま近にいる、いつでもあのひとは現われる」と確信したと。この個所を言葉どおりに受け入れるとすれば<sup>(33)</sup>、この一瞬に地上界と幽明界の境界が消滅し、自我と非我との対立が止揚し、内部と外部が溶融して、天界の恋人との再開ないし存在の相対化を感覚した、ということである。文学史上においてこの条は、『夜の讃歌』第三歌の基底体験をなすとされている。そしてこの5月13日を境に急に『マイスター』が消え、あとは23日に「『マイスター』についてあれこれ考えた」とあるだけである<sup>(34)</sup>。7月の日誌の終わりまで『マイスター』は一行も出てこない。

「ゾフィ死後の日記」はいくつかの点で重要な意味を持っている。その一は、この間にノヴァーリスにおいてゲーテの受容とその超克が進捗した

と推定されることである。その二は、ゾフィ像の変容である。あるいは内在化といってもいい。

「ぼくはますますあのひとを想って生きなければならない——あのひとのためにだけ、ぼくはいる——ぼくやほかの誰かのためではない。どんな瞬間にだって、あのひとにふさわしくあろう——ぼくの主たる使命は——すべてをあのひとのイデーに関連づけることとなるだろう<sup>(35)</sup>。」(5月17・18日)

「昼も夜もずっと、あのひとの死から受けた不安——ぼくの境遇の孤独——あのひとを喪った恐怖をまた感じた。

あのひとが居なければ、ぼくにはこの世は無だ——<sup>(36)</sup>」(5月20日)

その三は、ゾフィ死後72・73日目の5月29・30日の「国境の腕木遮断機とグリュニンゲンの間で、うれしいことにフィヒテの自我の本当の観念に思い当たった」とある個所である<sup>(37)</sup>。前述のようにノヴァーリスは、1795年秋から1796年秋にかけて、「フィヒテ研究」に取り組んだ。かれにとって初めての最も包括的かつ体系的な哲学研究である。親友のフリードリッヒ・シュレーゲルに婚約を報告するこの時期の手紙の中に、きわめて印象的な一節がある。「ぼくのお気に入りの研究はもともと許嫁と同じ呼び名なんだよ。ゾフィと言うんだ——哲学(フィロゾフィ)はぼくの人生の魂であり、ぼく固有の自我を解く鍵なんだ。このひとと知り合ってから、ぼくは哲学研究でもすっかり精錬(アマルガム)された。」(1796年7月8日)<sup>(38)</sup>

ノヴァーリスがフィヒテと会ったのは、1795年5月末のことである。イエーナ大学の哲学教授でフィヒテ哲学の祖述者、フリードリッヒ・イマーヌエル・ニートハマーのもとであった。詩人ヘルダーリーンも同席していた。この時の話柄について、ニートハマーが簡潔な日記を残している。

「宗教について活発に議論。啓示について、また哲学にとってまだ多くの問題が未解決であるということ<sup>(39)</sup>。」

この晩のほぼ一年前の5月18日、フィヒテは新しい員外教授としてイエーナ大学に赴任してきた。三十二歳の誕生日を明日に控えた日である。キール大学に転任したラインホルト教授の後任だった。子沢山の麻織職人の長

子に生まれたかれは、幼時から英才を顕したが、三十近くになるまで貧窮に悩まされつづけた。かれの名声は、カントの知遇を得るため手土産がわりに持参した論文「あらゆる啓示の批判の試み」(1792年)に始まる。さらにフランス革命に触発されて成った二つの政治的論文によって、フィヒテは「人権の最も果敢な擁護者<sup>(40)</sup>」とみなされるようになった。すなわち「ヨーロッパ諸侯によりこれまで抑圧されし思想の自由の返還を要求す」(1793)と、「フランス革命についての公衆の判断を是正せんがために」(1793)である。イエーナ大学に招聘される前後の数年間、フィヒテが独創的思想家としての面目を遺憾なく発揮した豊饒の時である。主著『全知識学の基礎』(1794)を初めとして、『全知識学の概念について』(1794)、『理論的能力に関する知識学の特性綱要』(1795)、『知識学の原理による自然法の基礎』(1796)、『知識学の第一序論』(1797)、『知識学の第二序論』(1797)、『知識学の新しい叙述の試み』(1797)、『知識学の原理による道徳学の体系』(1798)等々。フリードリッヒ・ヒーベルの推定によれば、ノヴァーリスのフィヒテ読書はフィヒテ哲学前期のほぼ全著作を網羅している。すなわち、『あらゆる啓示の批判の試み』から『知識学の新しい叙述の試み』まで<sup>(41)</sup>。「ゾフィ死後の日記」の5月26日と27日には、フィヒテの『自然法』をよみ、とくに道徳について思索したとある<sup>(42)</sup>。フィヒテ哲学が世紀末の若者たちの心をどれほど捉えたかは、つぎのF・シュレーゲルの有名な「断章」に記憶されている。

「フランス革命とフィヒテ哲学とゲーテの『ヴィルヘルム・マイスター』は時代の三大傾向である<sup>(43)</sup>。」

フィヒテをノヴァーリスが少年時代から知っていた可能性がある。フィヒテの後见人だったエルンスト・ハウボルト・フォン・ミルティッツの死後、ノヴァーリスの父ハインリッヒ・ウルリッヒ・エラスムス・フォン・ハルデンベルクが学資を援助しているからである<sup>(44)</sup>。しかし資料は沈黙している。前述のように1795年の5月に再会し、秋からフィヒテ哲学との対決が始まることのみわかっている。ノヴァーリスが遺したおよそ五百ページに及ぶ哲学ノートは、その後の「ヘムステルホイス研究」や「カント研

究」にも継承される特性を示している。まず原典から自由自在に抜き書きが行われ、触発と刺激によって表現は変容し、独自の着想が付加されて、さらに思索が飛躍していく。ノヴァーリスの息づかいが如実に感じられる独特のノートではあるが、原典とその補足や奪胎を慎重に計量しなければならないのである。この膨大な研究ノートからノヴァーリスの到達した成果を見極めるのは、もとより簡単ではない。

周知のように『全知識学の基礎』でフィヒテが定立した根本原則の第一は、絶対我の働きを述べていた。

「自我は根源的に端的に自己自身の存在を定立する<sup>(45)</sup>。」

第二原則は「自我に対して端的に非我が定立される<sup>(46)</sup>。」

フィヒテの自我は「あらゆる実在性を自己の内にとらえ、無限を満たそうとするもの<sup>(47)</sup>」であり、「端的にそれがあるところのもの<sup>(48)</sup>」であるという。いわば活動と活動の所産を兼有している自我である。カントの主観的観念論がさらに徹底して提示されている。自己のうちから自己のために定立した「非我」との相克によって、無限に展開する行的弁証法である。定立・反定立・総合の過程は自我と非我の交代限定による無限運動である。自我は非我を、自我によって制限されたものとして定立する。この反定立は「端的に一切の根拠なしに<sup>(49)</sup>」なされる。これをフィヒテは自我≠非我と定式化している<sup>(50)</sup>。自我はすなわち自らを限定しつつ、非我に向かって無限に努力する。きわめて倫理的色彩の濃い理想主義の思想が打ち出されていると言えるだろう。

ところがノヴァーリスは「フィヒテ研究ノート」(1795-96)の中で、このドイツ観念論の懸案を易々と乗り越えてしまう。

「自我=非我——あらゆる学問と芸術の最高の命題<sup>(51)</sup>。」

フィヒテはカントを批判して、「全哲学の基礎がどこにも扱われていない<sup>(52)</sup>」と書いている。カントにおける自然は自我の対立者であり、フィヒテのように自我から展開するものではなかった。自我は自然から与えられた所与の構成者にとどまり、現象が前提となって初めて認識が可能になった。そして現象の背後の物自体は、認識の対象とはなりえなかった。フィヒテ

の自然は自我から創出される。実在はすべからく自我の純粹な自己意識の所産であるという。すなわち純粹自我が自然を産みだすのである。カントの二元論、主観と客観、形式と内容などの対立は、かくしていわゆる「事行」の思想によって止揚される。フィヒテの非我は自我によってのみ定立されるが、自我は非我によって完全に否定されている。この論理的矛盾を解決すべく第三原則が導入されるのである。しかしあくまでも自我は自らを限定しつつ、非我に向かって無限に努力するという動的緊張関係に重点が置かれているように思われるのである。

ノヴァーリスは「フィヒテ研究」の中で、「ぼくはどこから来て、どこへ行かなければならないか、どのように歩み続けなければならないか」と自問している。「日記」の中の「フィヒテの自我の本当の観念に思い当たった」という記述はなにを意味するのだろうか。F・ヒーベルは「無限の自我性」の発見と推定している。

「有限な自我の固有の層から、無限の自我性が明らかとなり、かれの中で融合された<sup>(53)</sup>。」

ノヴァーリスの命題「自我＝非我」は、この間の機微を説明しているかもしれない。フィヒテと異なり二元論的出发点が始めから止揚された世界、いわば「神」の領域の発見、全一な調和の世界の予感にたどりついた可能性がある。そしてゾフィの墓前で不可思議な体験が契機となって、神秘の扉へと導かれたのではなかろうか。外部の表象世界にありながら内部世界を感覚できるという予感は、ゾフィの死をきっかけにいよいよ深まっていく。時空を越えて「見えない世界」の内部感覚化が進行していることが、日記の記述からうかがえるのである。

「感覚的な痛みがうすらぐにつれて、精神的な悲哀がますます大きくなり、静かな絶望のようなものがますます高まっていく。世界はいよいよなじみ難く——まわりの事物はいよいよどうでもよくなっていく。それにひきかえ、ぼくの周りとはぼくの内部はますます明るくなっていく——<sup>(54)</sup>」(5月22日)

そして翌日には、努力とある手段により一定の気分を思いのままに内部

にかもしだせなければならぬと記す<sup>(55)</sup>。自在に自己統御できるように鍛練しようとする。死さえも統御して、至高者に対する真情の証明、真の献身の行為となすのだ。これがぼくの使命だと<sup>(56)</sup>。6月6日には、神よ、この名状しがたい愛しい苦痛を——悲愁の思い出を——果敢な憧憬を——雄々しい決意を、そして堅忍不拔の信仰をもちつづけさせてくださいと念じる。さらにつづけて、「ゾフィなしでは、ぼくは無だ。あのひとがいてこそ全だ」と記す<sup>(57)</sup>。読者は、ノヴァーリスの内部空間がますます広がっていくのを感じる。6月9日には、孤独のイデーを発見した、あのひとが死んでぼくにとっては全世界が死に絶えたのだ、ぼくはこの世のものではないと書く<sup>(58)</sup>。そしてゾフィ死後103日目に、「キリストとゾフィ」と記して、ゾフィの神化を決定づけるのである<sup>(59)</sup>。

かような死者との対話と哲学思想への沈潜は、カントの実践理性の要請やフィヒテの事行を越えたより高次の認識の門戸にノヴァーリスを導いた可能性がある。そして1797年10月から11月にかけての「ヘムステルホイス研究」が、一層この境地を深めていったと思われるのである。この時期に『マイスター』への言及がなくなったことは、あながち偶然ではあるまい。(以下次号)

## 注

- (1) Novalis Schriften. 5 Bde. Stuttgart 1960-1988. Bd. IV, S. 692ff. u. S. 1045ff. Abgek. N.S. IV-692ff.; 1045ff.
- (2) N. S. IV-687ff. ; 1036ff.
- (3) N. S. IV-367.
- (4) N. S. a. a. O.
- (5) N. S. IV-206.
- (6) N. S. a. a. O.
- (7) N. S. IV-161.
- (8) N. S. a. a. O.
- (9) N. S. IV-418ff.
- (10) N. S. I-390ff.
- (11) Gerhard Schulz : Novalis. Reinbek bei Hamburg, 1969. S. 50.
- (12) N. S. IV-183ff. ; 442 ; 802.

- (13) N. S. IV-439f.
- (14) N. S. IV-188.
- (15) N. S. IV-190.
- (16) N. S. IV-191
- (17) N. S. IV-192 ; 452f.; 934.
- (18) N. S. IV-192.
- (19) N. S. IV-452f.
- (20) N. S. IV-27f.
- (21) N. S. IV-27~296.
- (22) N. S. IV-29~49.
- (23) N. S. IV-29.
- (24) N. S. IV-30.
- (25) N. S. IV-30.
- (26) N. S. IV-30.
- (27) N. S. IV-31.
- (28) N. S. IV-31.
- (29) N. S. IV-31.
- (30) N. S. IV-33.
- (31) N. S. IV-35.
- (32) N. S. IV-40★.
- (33) N. S. IV-35f.
- (34) N. S. IV-39f.
- (35) N. S. IV-37.
- (36) N. S. IV-38.
- (37) N. S. IV-42.
- (38) N. S. IV-188.
- (39) N. S. IV-588.
- (40) Fichtes Werke. Leipzig o. J. Bd. 1, S. 232.
- (41) Friedrich Hiebel : Novalis. Bern u. München 1951/1972. S. 131.
- (42) N. S. IV-41.
- (43) Friedrich Schlegel : Athenaeum. Bd. 1, S. 232.
- (44) N. S. V-845 ; IV-539 etc.
- (45) J. G. Fichte : Grundlage der gesammten Wissenschaftslehre. I , S. 98.
- (46) Fichte : a. a. O. S. 104.
- (47) A. a. O. S. 270.
- (48) A. a. O. S. 109.
- (49) A. a. O. S. 252.
- (50) A. a. O. S. 104ff.

- (51) N. S. II-542.
- (52) Fichtes Werke, I. H. Fichte-Ausgabe. Zweite Einleitung in die Wissenschaftslehre. §6 : W. W. I. S. 472.
- (53) F. Hiebel : a. a. O. S. 143.
- (54) N. S. IV-39.
- (55) N. S. IV-40.
- (56) N. S. IV-41.
- (57) N. S. IV-44.
- (58) N. S. IV-45.
- (59) N. S. IV-48.